



学校法人
鎌倉女子大学

平成26年度大学院・大学・短期大学部入学式

—学長式辞から抜粋—

入学おめでとうございます。鎌倉女子大学に心から歓迎をいたします。教職員一同、皆さんの入学を楽しみに待っておりました。

各学科、今年も、大変な競争ぶり、特に今年の入試の特徴は、高い成績レベルでの激しい競争になりました。その難関を勝ち抜いて、今日、この松本講堂に身をおく皆さんお一人お一人です。ですから、皆さん、大いに自信を深めて下さい。

さて、鎌倉女子大学は、学祖・松本生太先生によって、昭和18年に基を築かれまして、今年、ちょうど創立71年目のスタートを切ったところ。どうぞ、新入生の皆さんも、今日からは、その伝統を担う一員となった誇りと自負をもって、稔り豊かな4年間を、また2年間を送って下さることを願っています。

学生生活は、受講・実習・就職活動と、相当忙しさに追われます。特に大学院・短期大学は、2ヵ年、瞬く間に過ぎてしまいます。ですから、入学に際し、立派なスタートを切るために、今あらためて、自分は何のために高等教育の門をたたいたのか、自分自身に問いかけて頂きたいと思います。また、自分は将来どのような職域に進みたいのか、静かにイメージして頂きたいと思います。大リーグで活躍しているイチロー選手は、こういったそうです。「夢は近づくと目標が変わる」と。しかし、さすがに求道的にさえ見えるイチロー選手のこと、彼は、こういうことも忘れませんでした。「しっかりと準備もしていないのに、目標を語る資格はない」と。どうぞ、皆さん、いよいよ大学生活のスタートの時、身構えて下さい。

ただ、現代社会は、さまざまな情報に溢れ、選択肢が多様であるだけに、就学への意志が今しっかりと確認出来ていたとしても、在学中多々迷われることもあるのではないかと想像します。ある哲学者は、こういいました。「若い人は、年老いてしまった人よりも、人生をより真面目に感じるものです。青年自身にはまだ決断の余地が残っているからであります」と。それは、確かにそうかも知れませんね。私のような年とってしまった人間は、やるべきこと、またやれることがもう決まってしまう。これに対して、現代社会に限らず、何時の時代にあっても、若い人の前には無限に選択肢が開かれているわけですから、その中から自分がどういう道を選び取るのか、その多様性に比例して、その決断に向けて、迷いは一層深いともいえるわけです。

今、大学は、文部科学省によって教育の質保証がやかましくいわれています。学生の厳

格な「出席の管理」・「学修の評価」が求められています。ですから、そもそも、この「ガクシュウ」という言葉さえ、単に「学び習う」ではないんだと、「学び修める」と書かなくてはいけない、つまりただ授業に出て、単位を取ったというのではなく、その一つ一つの科目の内容をしっかりと修得、身につけているのかどうか、それを正しく評価しなくてはならない、こういわれるようになってきました。

よくラーニング・アウトカム、学修成果といいますが、その学生が在学中どのような学習経験をしたのか、その結果、卒業時、どれだけの実力を身につけているのか、それを可視化すべきだ、つまりその内容を目に見える形の、万人に分かるような評価システムを作るべきだ、こういった主張も強く語られるようになってきました。人によれば、あまり学生たちが勉強しなければ、また先生方が危機感をもって指導しなければ、もっと安直に、全国一律大学卒業試験を実施すべきではないかといった意見さえ口にする人も出てきました。私は、学部教育を崩壊させるものとして、これには大反対であります。しかし私たち教員も君たち学生も、大学で何を、どのように身に付けていくのかという課題を余程真剣に受け止めなければ、これまでのような通過儀礼的な学習経験にお互いに甘んじていくことになっていけば、そうした意見が今後一層幅をきかせていくことになるでしょう。君たちも僕たちも、お互いにしっかりと学び合い、ラーニング・アウトカム、実際上の成果を出すことによって、そうした安直な意見が幅をきかせないように、本来の大学教育を守らなければなりません。その使命をお互いに共有してもいるわけです。

私も、授業をもちます。一緒に勉強しましょう。

※ヤスパース著『大学の理念』福井一光訳 理想社

[>前のページへ戻る](#)